２６年1月

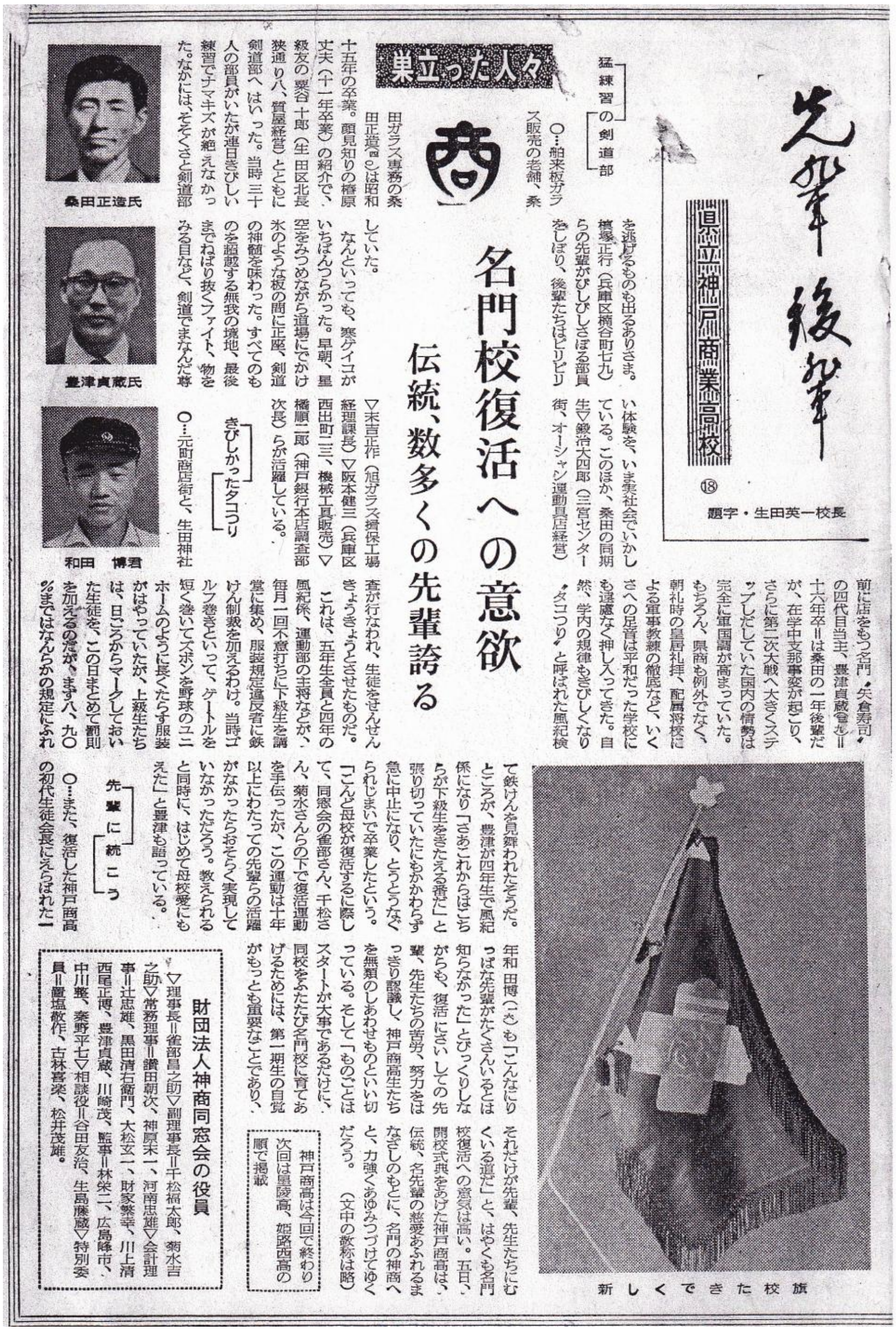
S 37年　産経新聞に掲載された　　巣立った人々

県商の「先輩・後輩」の記事を紹介します　⑱

今回は　「名門校復活への意欲」

伝統、数多くの先輩誇る

「先輩・後輩」の題字は 生田 英一校長です



先輩 後輩

県立神戸商業高校

⑱

題字・生田英一校長

巣立った人々

名門校復活への意欲

伝統、数多くの先輩誇る

猛練習の剣道部

○…船来板ガラス販売の老舗、桑田ガラス専務の桑田正造（四〇）は昭和十五年の卒業。顔見知りの椿原丈夫（十一年卒業）の紹介で、級友の栗谷十郎（生田区北長狭通り八、質屋経営）とともに剣道部へはいった。当時三十人の部員がいたが連日きびしい練習でナマキズが絶えなかった。なかには、そそくさと剣道部を逃げるものも出るありさま。槙塚正行（兵庫区楠谷町七九）らの先輩がびしびしさぼる部員をしぼり、後輩たちはピリピリしていた。

なんといっても、寒ゲイコがいちばんつらかった。早朝、星空をみつめながら道場にでかけ氷のような板の間に正座、剣道の神髄を味わった。すべてのものを超越する無我の境地、最後までねばり抜くファイト、物をみる目など、剣道でまなんだ尊い体験を、いま実社会でいかしている。このほか、桑田の同期生▽鍛冶大四郎（三宮センター街、オーシャン運動具店経営）▽末吉正作（旭ガラス摂保工場経理課長）▽阪本健三（兵庫区西出町三三、機械工具販売）▽橘順二郎（神戸銀行本店調査部次長）らが活躍している。

きびしかったタコつり

○…元町商店街と、生田神社前に店をもつ名門〝矢倉寿司〟の四代目当主、豊津貞蔵（四九）＝十六年卒＝は桑田の一年後輩だが、在学中支那事変が起こり、さらに第二次大戦へ大きくステップしだしていた国内の情勢は完全に軍国調が高まっていた。もちろん、県商も例外でなく、朝礼時の皇居礼拝、配属将校による軍事教練の徹底など、いくさへの足音は平和だった学校にも遠慮なく押し入ってきた。自然、学内の規律もきびしくなり〝タコつり〟と呼ばれた風紀検査が行なわれ、生徒をせんせんきょうきょうとさせたものだ。

これは、五年生全員と四年の風紀係、運動部の主将などが、毎月一回不意打ちに下級生を講堂に集め、服装規定違反者に鉄けん制裁を加えるわけ。当時ゴルフ巻きといって、ゲートルを短く巻いてズボンを野球のユニホームのように長くたらす服装がはやっていたが、上級生たちは、日ごろからマークしておいた生徒を、この日まとめて罰則を加えるのだが、まず八、九〇%まではなんらかの規定にふれて鉄けんを見舞われたそうだ。ところが、豊津が四年生で風紀係になり「さあこれからはこちらが下級生をきたえる番だ」と張り切っていたにもかかわらず急に中止になり、とうとうなぐられじまいで卒業したという。

「こんど母校が復活するに際して、同窓会の雀部さん、千松さん、菊水さんらの下で復活運動を手伝ったが、この運動は十年以上にわたっての先輩らの活躍がなかったらおそらく実現していなかっただろう。教えられると同時に、はじめて母校愛にもえた」と豊津も語っている。

先輩に続こう

○…また、復活した神戸商高の初代生徒会長にえらばれた一年和田博（一七）も「こんなにりっぱな先輩がたくさんいるとは知らなかった」とびっくりしながらも、復活にさいしての先輩、先生たちの苦労、努力をはっきり認識し、神戸商高生たちを無類のしあわせものといい切っている。そして「ものごとはスタートが大事であるだけに、同校をふたたび名門校に育てあげるためには、第一期生の自覚がもっとも重要なことであり、それだけが先輩、先生たちにむくいる道だ」と、はやくも名門校復活への意気は高い。五日、開校式典をあげた神戸商高は、伝統、名先輩の慈愛あふれるまなざしのもとに、名門の神商へと、力強くあゆみつづけてゆくだろう。（文中の敬称は略）

桑田正造氏

豊津貞蔵氏

和田　博君

新しくできた校旗

神戸商高は今回で終わり次回は星陵高、姫路西高の順で掲載

財団法人神商同窓会の役員

▽理事長＝雀部昌之助▽副理事長＝千松福太郎、菊水吉之助▽常務理事＝讃田朝次、神原末一、河南忠雄▽会計理事＝辻忠雄、黒田清右衛門、大松玄一、財家繁幸、川上清、西尾正博、豊津貞蔵、川崎茂、監事＝林栄二、広島峰市、中川整、秦野平七▽相談役＝谷田友治、生島藤蔵▽特別委員＝曽塩敬作、古林喜楽、松井茂雄。

歴史資料委員会